

## 発心集と鴨長明

服部 七郎

本稿において、「方丈記」「発心集」の本文は、「新潮日本古典集成」本（三木紀人校注）に拠った。

による拾遺的編集と見なす説を提出している」として、貴志氏の「ひじりと説話文学、——『発心集』の世界」（『日本の説話』中世Ⅰ、昭和48年11月）を注しておられるが、筆者はまだその論文を見ていない。

青山克彌氏は、「鴨長明の説話世界」（昭和59年10月）において次のように述べておられる。

「卷七・卷八をやはり長明自身の手になるものとする説は、近年、とみに有力であり、詳細は省くが、その証左は相当に挙げられている。一例を示せば、（……中略……）卷六後置跋文の諸行往生の思想は、卷七——七十七、七十八、七十九（テキスト卷七の2・3・4話——筆者注以下同）において具象化されていると見られ、跋文末尾と卷七の結合の相は一応有機的と言えるであろう。卷二——二十四（卷二・12）は、たしかに説話部そのものが異朝の話で占められ、『天竺震旦の伝へ聞くは遠ければ書かず』云々の序の一条に抵触することから、従来、二十五（卷二・13）の異朝説話『善導和尚仏を見る事』とともに後人増補とされていた。しかし、卷三——三十二（卷三・7）の評論部に『かの善導和尚は念仏の祖師にて、この身ながら証を得給へる人なり』とあ

「卷七・卷八についていえば、これは貴志氏なども説いておられるとおり、やはり拾遺と見るべきものである。そこに収められている説話の収集者が長明であったかどうかはとにかくとして、編集は長明以外の後人で、その成立も長明没後のことと考えてよいと思う。」と述べられた。（『中世文学試論』）

ところで、木藤氏は前書において貴志氏の意見に触れ、

「貴志正造氏は、数寄説話が卷六・卷七にあり、卷八に長明に関わり深い神道説話を収めていることなどを論拠として、卷七・八を長明

り、『かの』という指示語がみられるのは、三十二の執筆当時に、すでに二十五の存したことを証するものとも考えられる。これは、巻四―三十九(巻四・2)を受けて、巻四―四十二(巻四・5)の評論部に、『かの浄感貴所は日本第三の行人なれど』(傍点筆者)云々と叙するのと同じ筆法であるとすれば、二十四、二十五の両異朝説話の増補説も些か疑わしくなる」として巻七・巻八、長明執筆説の立場を打出しておられる。

さらに、氏は、

「跋文(巻六後文―筆者注)を全三段に分け、第二、第三段を後人の付加とする説が従来行われたが、跋文全部にわたって平均的に『往生要集』からの撰取がみとめられ、天台浄土教的な思念以外のものは見当たらないところから、全三段とも同一人物―長明の手になったとする石田瑞麿氏説が、近年有力である。」(前掲書、50ページ、注29)と述べておられる。

巻七・巻八の編述者については以上のような説がある。筆者も虚心に読むとき、長明独自の、あるいはそれらしい文句や考え方が随処に見えること、何よりも文体の同一性などから、長明作説に傾くものであるが、なお、本稿においては巻七・巻八の内容に触れることは必要最少限にとどめたい。

「発心集」の編述について、長明はその序文に、

「此れにより、短き心を顧みて、殊更に深き法を求めず、はかなく見る事、聞く事を註し集めつつ、しのびに座の右に置ける事あり。即ち、賢きを見ては、及び難くとも、こひねがふ縁とし、愚かなるを見ては、自ら改むる媒とせむとなり。(中略)、物しかあれど、人信ぜよともあらねば、必ずしも、たしかなる跡を尋ねず。道のほとりのあだことの中に、我が一念の発心を楽しむばかりにや、と云へり」

と書いていることによってその趣旨は明らかである。「方丈記」に、「五十の春を迎へて、家を出で、世を背けり。」とあるが、それ以来、聖と俗との間に揺れ動く自分の心を静めかねて、信心を固めるための例話を見聞の間に誌し集めて座右に置き、自己の励ましとしようとしたというのである。おそらく、それは出家の相当早い時期から始められたと考えていいであろう。なぜなら、「発心集」の成立時期については、まだ決定的な説を見るに至っておらず、通常「方丈記」成立(一一二二)後の二―三年頃が考えられているが、その僅かの年月で一〇二篇もの例話が集められたとは考えられないからである。「無名抄」は、「関清水事」の記事を信用すれば、その成立は建暦元年(一一二二)以後とならざるを得ない。このように考えると、「発心集」に盛られた、心情、精神はそのまま、「無名抄」「方丈記」「執筆時のそれとほとんど重ね合わせて考えることができる。「発心集」の資料としての重要性の一つはここにある。

因みに、この序文が源信の強い影響下に書かれていることは、すでに多くの先学によって指摘されているが、「しのびに座の右に置けることあり」の一文は、「往生要集」序文の結び、「これを座右に置いて、廃忘に備へん。」を連想させる。

引用序文の後半において、彼は、人に信じさせようとして説くのではない。街談巷説の中に、わが信心を確かめ、自分なりにささやかながら道心をおこして安心を得たいというだけのこと、と述べている。要するに、その真意はともかく、あくまで自分自身を鼓舞激励する手控えとして書き集めたもので、他人に見せようためのものではないと言っているのである。ここに「発心集」の一つのスタイルがある。

さて、本稿においては、秩序なく並べられた一〇二篇の説話を、いくつかの項目にまとめて、その内容を明確にするとともに、先学の教

すなわち、

E	D	C	B	A	内容
					巻話数
奇聞 逸話	数寄	執心	往生 発心	遁世 逐電	I (12)
⑬ ア	② 7、8		11 ア	5、9、10 ア	12ホ 4、6ホ 1、2、3
		10	12 ア 11 ホ	9 ア 11 ホ	5 ア 6 ア
④③ 9ホ 10			12 ホ	11 ア 9 ホ	8 ア 6 ア
14 ホ 15		3、12	10 ア	7、8、9 ア	1、2、3 ホ
6 ア	12 ホ 11 ホ		13 ア	3、5 ア	7 ホ
10 ア	5		13 ア	9 ア 11 ア	12 ア
14 ア		8、9	12 ア	6、7 ア	1 ホ
30	7	9	47	9	102

発心集の説話分類表

示を踏まえながら、その長明との関りを探ってみたい。分類に当たっては、序文の趣旨にのっとり、長明がその道心を鼓舞するに足ると考えたと思われる例話を先とし、以下その趣旨に従って順次に按配して次の五項目を設定した。その結果得たのが次の「表」である。すなわち、形式上からは道心の鼓舞激励という観点から言えば、Aが最も重くEが最も軽い。

- (一) A、逐電遁世。B、発心往生。C、執心。D、数寄。E、逸話奇聞。とし、各巻ごとにその分布を示した。
- (二) 法華経信仰に関わるものは「ホ」、阿弥陀信仰に関わるものには「ア」の記号を付した。
- (三) 高僧の逸話と考えられ、宗教的色彩を持ちながらも単なる説話的興味の濃厚と考えられるものは、「E」項に入れて「○」で囲んだ。
- 右のうち(一)について言えば、A項とB項はその例話の性格においては同一である。ただ、A項の主人公たちは、殊に「逐電」という形をとる点において、また、その徹底した厭離穢土の志の激しさにおいて際立っているのであえて別項とした。以下AとEの各項及び(二)について考察する。

#### A 逐電遁世

全部で九篇を数える。この話群の主人公たちは、すべてを捨てて求道に専念するあまり人を避け世を遁れて所在を晦まし、人に知られることなく山野に果てた人たちである。一つには修道を妨げられない閑寂の境を得るため、二つには、かかる至純な宗教的行為にも、人に示して誇ろうとする名聞の心が忍び込むのを防ぐためであったと思われるし、また、一群の勝他名聞の徒からおのれを峻別するためであったと思われる。長明は「出世の名聞は譬へば血を以て血を洗ふが如し」(巻一・12)と言って、元来、純粹であるべき出世隱遁に混じる名聞を重き禁忌として警めている。開巻第一話、第二話に登場する玄敏(玄賓)は、桓武、平城に召されて大僧都に任ぜられた人であるが、ある時突然失踪し、越の国では弊衣垢頭の舟頭、伊賀では郡司の馬飼いとなって放浪し、身分を見あらわされるや直ちにまた行方を晦まし、ついに知られぬままに果てた。他の例話も皆これに類するものであるが、そ

の死に至るまでの孤独寂寥と饑餓との戦い、寒暑と衣食住の労苦辛酸などは常人の耐え得るところではなく、まさに選ばれた使徒にのみできる殉教的行為であった。この意味で、長明が、序文で述べた「及び難くとも、こひねがふ縁」と考え、熱い讃嘆の情をもって記しとどめたものであったろうと思われる。「発心集」の編集に当たって、この話群がまず第一にとり上げられ、その大部分が巻一の冒頭部に集中している理由もうなずかれるのである。(「表」参照)これらこそ、ともすれば緩もうとする彼の求道心を鼓舞するに最もふさわしい説話群であったと考えられる。だが、行為の性質上、その数は多くない。

## B 発心往生

この話群に属するものは四十七篇にのぼるが、主題が心奥の微妙を極める問題だけに視点の置き方によってどの話群に入れるべきか差違を生ずることもあり得よう。ともかく、A群のものとともに「発心集」の骨格をなす話群である。描かれる群像も、職業、身分の貴賤、男女老若、発心し往生する原因や事情、または状況も千態万様である。史上に著名な人物としては、慶滋保胤、大江定基、玄實(玄敏)、藤原顕基、藤原成信、藤原重家、藤原有仁、源頼義、西行とその女、恵心僧都などがある。それにもまして地位も身分もない、全く無名人々が多い。その多くはA群の人物たちと同じく、生活の基盤から遊離し、一切を捨てて仏だけを最後の頼りとした異常な姿を露呈している。二、三例を挙げたい。

(1) 「中比、近江の国に乞食してありく翁ありけり」と語り出される「ましての翁」は、見る事、聞く事につけて「まして」と言った。

ある人の夢にこの乞食が極楽往生間違いなしと見えたので、その平生の所業を尋ねると、「別に特別のことはしていない。飢え、寒暑に

つけては地獄の苦しみはましてと思い、美味にありついたときは、極楽の甘露はましてと思いやつて執心を残さず、此の世の楽しみにふけらない」と答えた。(巻三・一)

(2) 讃岐の国にいた源大夫という男は、「仏法の名をだに知らず、生き物を殺し、人を滅すよりほかの事なければ、近きも遠きも、おち恐れたる事限りなき」者であった。これが狩の帰途に仏法を聞き、即座に出家して阿弥陀仏を呼び求めながら山も水も厭わず直行し、西の海の見える処まで行って弥陀の声を聞きながら果てる、実情は餓死である。(巻三・4)

(3) 近ごろ、天王寺に一人の聖がいて、言葉の末ごとに「瑠璃」という二文字を付けたので、人々はその僧の名の下にこの文字をつけて呼んだ。ひどい襤褸を着、汚い布袋に貰い集めた食物を入れ、歩きながら取出しては食べた。子供達が笑ったりはやしたたりするが咎めることもしない。袋の食物を悪童連に与えることもあったが子供達も汚ながって地に捨てた。すると「瑠璃」はまた拾って収めた。垣牆樹下に寝て物乞いして歩いたが、ある時、学僧と教義の深奥について問答したりした。しかし人にその事を尋ねられると笑いに紛らした。(巻一・10)

その他、「あま人、法師、をとこ、女人等清浄。」と言って逢う人ごとくに拝んだ「仏みよう」と呼ばれた僧(巻一・10)、山中で木の葉の散るのを見て発心し、その場に庵を作って往生を遂げた木樵の親子(巻三・9)、天王寺沖から入海往生を遂げた女房の話(巻三・6)など。(2)のような書承説話もあるが多くは長明が書きとめなかつたら世に残ることとはなかつたと考えられるもので、まさに「道のはとりのあだごとの中に」彼の道心に触れた数々であったと思われるのである。これらは当時の乱世を生きた一部庶民の生きざまとして興味を惹くものであるが、

常識的には狂的とも見えるその行動の底から、炎のような至純な求道心が人を撃つて来る。三木紀人氏はこれらの群像について、「激情、妄執、狂気、恩愛、失踪、隱遁願望、死への関心と凝視、はるかなる超越的なものへの視線」と書いておられるが、それらのいくらかの部分を長明の人間像に重ね合わせて考えることが許されるであろう。これらの群像をここまで駆り立てた乱世のすさまじさを、「方丈記」描くところの五災異の描写に重ねて思い見るべきであろうし、さらに、その実践面はともかく、長明がどのような人、どのような生きざまを道心の鼓舞と考えたかを知ることができる。そして、その延長線上に長明という人の実像が彷彿として立ち現われるのを見る思いがする。これはA群説話についても言えることである。

### C 執心

ここには花木や名聞への執着、あるいは女人の嫉妬、官職への異常な執心など九篇がふくまれる。もちろん「C」群以外でも「執心」は描かれているわけだが、ここではそれを主題として見られる話を数えあげた。その中、巻五・3は「母、女を妬み、手の指她（ひぢ）に成る事」である。先夫の娘を連れ子にそのまま再婚した年輩の女が、娘を現在の夫に添わせて自らは家の中の一室に身を退いて暮らしていた。最初の間こそ自制していたが、時が経つにつれて嫉妬に身を焼くようになり、両手の親指が蛇となり、「舌さし出でてひろひろとす」。この最後の一句に、人間のもつ妬心、執着心の恐ろしさが美事な形相を得ている。また、巻三・10「証空律師、希望深き事」、巻五・12「乞児、物語の事」の二篇には、老いさらばえて、なお、人の諫めを聞き入れず上位の職に執心する老人の姿を描き、巻八・3「仁和寺西尾の上人、我執に依って身を焼く事」には、相手に勝たんと名聞を相競う西尾の上

人が最後に身燈（自分の肉体を燃して燈明とし、仏に供養する行）する時、「今ぞ東尾の聖に勝ちをはてめる。」と叫んだという、すさまじいまでの我執の姿を描いている。

建仁元年（一一〇一）七月二十七日、和歌所の再興に当たって無官の長明がその寄人に任命されたのは破格のことであった。この前後から彼は後鳥羽院の恩顧によって抬頭して来るのであるが、その前年、正治二年九月三十日、院当座歌合において、院を中心にして、内大臣源通親、藤原俊成以下当代一流の貴籍歌人が堂上に着座するなか、彼一人が東階段下の敷石の上に着座させられたことを「明月記」は書き留めている。越えて建仁元年三月十六日、土御門内大臣影供歌合における記事にも、定家は長明の下に割注して、「雖五位其身凡卑、仍准六位讀之」と書いている。（注5）官位についてのことであろうが、「其身凡卑」とは辛辣と言わざるを得ない。彼が幼時に叙せられた中宮叙爵の従五位は世間には通用せず、地下として遇されたのである。「方丈記」には、「もし、おのれが身、数ならずして、権門のかたはらに居るものは、深くよろこぶ事あれども、大きに楽しむにあたはず。嘆き切なる時も、声をあげて泣く事なし。進退やすからず。起居につけて、恐れをのくさま、たとへば、雀の鷹の巢に近づけるがごとし。」という一文がある。これが保胤の「池亭記」に倣っていることはすでに周知のとおりであるが、それはそれとして、前述の「明月記」の記事を念頭においてこれを読むとき、当時における彼の社会的処遇と、それに伴う彼の無念さが実感となって伝わってくるのを覚える。

彼の遁世が「家長日記」の記す河合社事件を直接の原因とすることは、略々動かぬところとされている。それによれば、祢宜への補任を惣官祐兼に妨害されたとき、後鳥羽院は末社を格上げしてまで彼を慰留されたが、彼はそれさえ最初の希望に反するとして拒否し、何処と

もなく行方を晦ました。家長は、「あまりにも強情な心」とも、「正気の沙汰とも思えない」とも書いている。院の側近の立場から見ればまさにその通りであったであろう。

しかし、ここでその出家遁世を長明の側に立って考察してみたい。

「鴨長明集」には「住みわびぬいざさはこえしむでの山さてだに親のあとをふむべく」という歌を載せている。内容からして、父長継の死後、程経ぬ頃、前途を悲観しての作と考えられる。今から世に出ようとしている彼にとって、賀茂神社惣官としての父の庇護がいかに強力なものであったか、彼は痛感するところがあつたに違いない。それだけにそれを失つた彼の落胆は大きかった。結局、自殺はしなかったものの長明の父に対する敬慕の念は終生変らなかつたのではないか。河合社事件において、もし官途に就くだけが目的なら、別の神社を幹旋された院の慰留をお請けしてもよかつたはずである。それを拒否して河合社を固執したのは、父の経歴に倣って、「父のあとをふむ」というところに彼の本来の目標が据えられていたと解すべきであろう。他社をもつて代替できなかったのである。ここに長明の父長継に対する厚い追慕尊敬の念を見ることが出来る。

「統歌仙落書」<sup>(注7)</sup>には「出家の後、かもにまゐりて、みたらしに手をあらふとて」という前書で、「みぎの手もその面影もかはりぬる我をばしるやみたらしの神」の一首を載せている。右手に念珠をかけ、僧体となつた自分の姿を神の前に嘆いているのである。また、賀茂社歌合に彼が詠んだ問題作「せみのをがは」の歌も賀茂神社に関するものであつた。「発心集」巻八には、12・13・14と三篇続いて賀茂神社に係する説話が続いて、それで「発心集」は巻を閉じるのであるが、これらからも彼の賀茂神社に対する関心の強さを知ることが出来るし、そのもうひとつ奥には父への敬慕の念があつたと思われる。このよう

に見てくると、彼の遁世の窮極の原因は、単に官職に就けなかつたというだけでなく実力者祐兼によって「父のあとをふむ」という宿願がもはや果せなくなつたことを思い知らされたところにあつたと考えるべきであろう。

「十訓抄」(岩波文庫本、永積安明校訂)によれば「おなじくさきだちて、世をそむける人のもとへいひやりける」として、

いづくより人は入けん真くず原

秋風ふきし道よりぞこし

の一首がある。長明の遁世当時の述懐を歌つたものである。「くず」の葉が裏返るところから「裏見」に「恨み」を、秋風の「秋」に「飽き」を懸けて、深く時世を恨む心境を吐露しているのだが、それは、「すべて、あられぬ世を念じ過ぐしつ、心をなやませる事」(「方丈記」)への苦い懐古であつたにせよ、やはり父のあとを踏むことの出来なかつた無念さが中核にあつたであろう。上来見て来たように、彼の恨みは長く、かつ深いものがあつたと言わざるを得ない。そして「恨み」は遂げられなかつた「執心」にはかならない。

長明に関する「執心」の問題について考えるとき、ぜひ触れておきたいもう一つの事件がある。「吾妻鏡」が載せる記事がそれである。

「建暦元年十月

十三日辛卯。鴨社氏人菊大夫長明入道法名蓮胤依雅経朝臣之奉此間下向。

奉謁將軍家及度々云々。而今日当于幕下將軍御忌日。参彼法花堂。

念誦読経之間懐旧之涙頻相催。註一首和歌於堂柱。

草木モ靡シ秋キ霜消テ空ヲ苔ヲ払ッ山風ニ(吉川弘文館・国史大系32)

將軍実朝に対して拝謁幹旋の勞をとつたのは藤原(飛鳥井)雅経であつた。雅経は、以前、長明とともに和歌所の寄人であり、後に新古今和歌集の撰者となつた当代の歌人である。蹴鞠の名手であり、また、

大江広元の女婿として鎌倉方に親近していた。そういう関係で鎌倉下向が実現したと考えられるが、さて、その目的は何であったかということとは不明というしかない。奉調度々に及ぶとか、頼朝の忌日に法華堂に詣でて、懐旧の涙しきりに催したとかいう背後にはどのような事情があったのか。この長明の不可解な行動については、すでに先学諸家がとり上げて論説されているところであるが結局は推測的結論しか得られない問題である。

細野哲雄氏は、「雅経の勧めによって長明もその気になり、一緒に下向したのであろうが、出かける時の長明の心には、あわよくば歌人將軍実朝の和歌の師匠としても一度世に出ることができるともいざないう期待が当然あったであろう。」<sup>(注8)</sup>と書いておられる。いざなにしてもこの時長明に何らかの世俗的功利の念が働いたことは間違いないところであろう。そうでなければ、「方丈記」に、「おのずから、都に出でて身の乞匄となれる事を恥づ。」と書いた彼が、時の最高権威にわざわざ会いに行くはずがない。会見は徒労に終わったと考えられる。頼朝追懐の一首は裏返して解釈すれば実朝への不満の表明ともとれる。先の「河合社事件」において「家長日記」には、「この長明みなし子になりて、やしろのまじらひもせずこもりゐて待りしが」と書き、さらに祐兼が後鳥羽院に訴え申した言葉として、「社の奉公日あさし。祐頼にくらべば子息のよはひほどにはべれ共、よるひるの奉公かけてもおよぶべからず。」と記している。「家長日記」は、長明の神社奉公の怠慢を指摘しているのである。祐兼もまた、長明が、わが子祐頼とは親子ほども年長であるのに社への奉公日数という点では問題にならないと言っている。そのような長明を、神社の惣官としての祐兼としては祢宜に登用するということはできない相談であった。後鳥羽院が和歌所への精勤ぶりを見て祢宜登用を思いつかれたのは、慣習も、周

困の情勢も見極めないままの、言わば王者的気まぐれに過ぎなかった。定家も院のこうした軽卒さを嘆いている。<sup>(注9)</sup> こういうわけで、祐兼の道理を踏まえた抗議の前に、院があつさりと言説を撤回した趣は「家長日記」を注意して読めばわかる。この事件に関する限り、理は祐兼の方であった。結局、長明は八つ当たりの態度で行方を晦ましたのであったが、それでもこの時は恨みをぶつける対象があった。だが、この鎌倉下向にはそれがない。恨むべきは自己である。さらに掘り下げれば自己の心である。ここに長明は制御しがたい自分の心の問題に直面したと言える。鎌倉から帰って五ヶ月後、歳明けて建暦二年三月、彼は「方丈記」を書いた。その結文に言う。

「仏の教へ給ふおもむきは、事にふれて執心なかれとなり。今、草庵を愛するも、閑寂に着するも、障りなるべし。(中略)、静かなるあかつき、このことわりを思ひつづけて、みづから心に問ひて云はく、世をのがれて、山林にまじはるは、心を修めて道をおこなはむとなり。しかるを、汝、姿は聖人<sup>ひじり</sup>にて、心は濁りに染めり。栖はすなはち、浄名居士の跡をけがせりといへども、たもつところは、わずかに周梨槃特が行ひにだに及ばず」云々。

彼は自分の心を、あたかも他者の如くに取り出して、これに対かつて、お前は姿は僧侶であるけれども、心は濁り、すなわち、世俗的名利への執心に満ちている、と詰問している。これは悲痛な告白と言える。「方丈記」の文脈では頹齢になって自分の生涯を顧みての感懐と なっているが、遁世して十八年も経った今になって、草庵を愛するも云々と、それが障りであることに始めて気付いたような言い方も理屈に合わない。ここにはもっと切迫した、最近の生々しい衝撃といったものが看取される。鎌倉行は遁世の身が世俗的名利に負けたという点で、彼の発心を否定するものであり、空しく日野に帰った彼が痛烈な

悔恨に苛まれたのであろうことは想像に難くない。その自己嫌悪ともいべき色合いがここに影を落としている。

以上、彼の生涯における大きな出来事であった河合社事件と鎌倉下向とについて検討したのであるが、これらを通して、物事に深く執着する彼の性格の特色を指摘できると思う。どうにもならない事態によくよといつまでも拘泥し、恨み、怒り、あるいは既に棄てたはずの名聞に欲望を燃やす、その結果、躁から鬱へと振幅の大きい感情の動揺を示すのであるが、その行動のパターンを彼は誰よりもよく知っていた。「方丈記」の結文で、「心」を他在として扱っている反省の仕方もそれであるし、「発心集」の序文で、「心の師とはなるとも、心を師とする事なかれ」という箴言ふうの一文を掲げて、「心」というものに對する不信と頼り難さを表明しているのもそれであろう。「発心集」の真のテーマは、信用し難い自分の心との格闘であると言つて過言ではない。彼は、前の箴言に続いて、自分の統御し難い心を野に跳ねる鹿に喩え、このような心を抱いて求道の道を歩むのは、「牧士の、荒れたる駒を随へて遠き境に至るが如し。」と言つている。

さて、「表」に見るとおり、「執心」の例話は九篇にすぎないがそのモチーフは、部分的に、融解浸潤のかたちで、あるいは、裏返しの姿で、ほとんど「発心集」全体に及んでいる。先に挙げた、「母、女を妬み、手の指蛇くちなはに成る事」は、学者によっては、長明が単なる説話的興味によって書きとどめたものと解されているが賛成できない。上来見来たった彼の心情において、執着心の恐しさを、ほとんど手の指が蛇に変わる痛切さで、自己の問題として感じ取っていたと解すべきである。「証空律師、希望深き事、」その他の諸篇についても同様のことが言えよう。

## D 数奇

数奇説話は全部で七篇、しかも巻六に六篇が集中し他の一篇は巻七にある。数奇について「岩波古語辞典」によって字義の概要を示せば、動詞「好く」の名詞形として「好き・数奇」を挙げて、「①、恋の道②、芸道に徹すること、風流の道に身を投じること、③、片寄った好みを持つこと、僻愛、(中略)、『数奇、スキ、或作数奇。日本世話、呼僻愛曰数奇』(八文明本節用集)④、特に、茶の湯」とある。数奇、数奇ともに当字で、数奇と書くのは、数奇(すうき)との混同を避けるためであると「大言海」は説明している。これらによってこの字が指向するところは明らかであるが、長明は次のように定義する。

「数奇と云ふは、人の交はりを好まず、身のしづめるを愁へず、花の咲き散るをあはれみ、月の出入を思ふに付けて、常に心を澄まして世の濁りにもしまぬを事とすれば、おのづから生滅のことわりも頭はれ、名利の余執つきぬべし。これ出離解脱の門出に侍るべし」(六・九)と。これによれば、彼の言う数奇は、②を踏まえてむしろ③に近いことがわかる。風流に深く打込めば、世の交際を好まず、身の浮沈を忘れ、名利名聞の執着を払い、いわゆる「詩三百思無邪」の境地に到るところが解脱に通じるというのである。七篇の内容を見ると、和歌に關するもの三、笛、笙、琴と琵琶各一、隱遁数奇の生活一で、その所屬の詳細は「表」の通りである。この外、巻一の、花を愛して死後蝶となった佐国、橘木を愛して蛇となってその下に住んだ僧幸仙の話はむしろ執心の例話として語られていると見てその項に入れた。

さて以上のうち和歌に關して、恵心(源信)僧都が、はじめ和歌は「綺語のあやまり」として詠まなかったが、ある時、琵琶湖の朝景色に深く感動して、「聖教と和歌とは、はやく一なりけり。」と悟り、そ

後は折々に必ず和歌を詠んだという話を載せている(六・九)のは興味

深い。もとより恵心は長明の愛読書「往生要集」の著者で彼の最も尊崇した人物である。その人をしてかく言わしめているのは、彼が和歌をもって求道の一助と考えていたことを示すものである。彼は「況や和歌はよくことわりを極むる道なれば、これによせて心をすまし、世の常なきを觀せんわざども、便りありぬべし」(前同)と言っている。

和歌を仏道の一助とする考え方は、決して目新しいものではなく、僧侶にして和歌に親しんだ人の例はむしろ枚挙に遑がないほどであるが、笙、笛、琵琶、琴まで挙げたのは琵琶の名手であった長明の立場を示すもので、「方丈記」の、「もし、跡の白波にこの身を寄する朝には、岡の屋に行きかふ船をながめて、満沙弥が風情を盗み、もし、桂の風葉を鳴らす夕には潯陽の江を思ひやりて、源都督のおこなひをならふ。もし、余興あれば、しばしば松のひびきに秋風楽をたぐへ、水の音に流泉の曲をあやつる。」という記述を思い出させる。宝日という僧が、朝、昼、晩に和歌を詠ずることを行法としたことを述べたのに続けて、「いとめづらしき行なれど、人の心のすむ方、様々なれば、勤めも又一筋ならず。潤州の曇融聖は、橋を渡して浄土への業とし、輔州の明康法師は、船に棹さして往生をとげたり」(前同)とも、「管絃も、浄土の業と信ずる人の為には往生の業となれり」(七・五)とも書いている。つまり、名利を離れた心で専心勤める行は仏道を妨げるものではない、すなわち、諸行往生が彼の信心に対する態度であった。方丈の住居に和歌・管絃の抄物や、琴、琵琶を携えたのもそれであり、「発心集」において、法華經、阿弥陀に対する信仰はもちろん、地藏尊、弥勒菩薩、修驗道、神道、垂跡説など、雑多な信心の態度や人物を書き記しているのもこの点から理解できる。彼の信仰は多分に複雑であり、また寛大であったし、諸行(数奇)も、回向によって往生の業となる

と考えられたのである。

しかし、また一方において、「方丈記」結文に見た通り、「仏の教へ給ふおもむきは、事にふれて執心なかれとなり。」とする認識は牢固として彼にはあった。すべての執心を棄却し、勇敢に仏の教えを實踐した人々がいた。ただ、それは彼にとっては「賢きを見ては、及び難しと感じられる部類の人々であった。身命までも捨てて顧みなかった「A」グループの人々に讃仰の念を抱いたが故に、その多くを、真先に、巻頭近くに取り上げていることは前に見た通りである。しかし、彼は、これらの人々には及び難しとしてあえて一線を画している。巻二・11、「或る上人、客人に値はざる事」においては、年頃、道心深く念仏を勤めていた聖が、大事な用事があると言って来客を断った話を載せている。弟子が不思議に思って聞くと、「此の度、生死を離れて、極楽に生れんと思ふ。是、身にとりて、極まりたる営みなり。何事か、是に過ぎたる大事あらむ」と答えた。これは常住坐臥、念仏に専心しようとする定心念仏の立場である。これに対して、長明は「此の事、あまりきびしく覚ゆるは、我が心の及ばぬなるべし」と感想を述べている。彼は数奇も仏道の一助とする回向の態度をもって信仰というものを考えていた。「方丈記」に「もし、念仏ものうく、読経まめならぬ時は、みづから休み、みづからおこたる。」と書いていることや、先述の鎌倉下向のことなどを考え併せれば、彼が信仰一途に他を顧みない求道者であったとは考えがたい。彼の態度は定心念仏に対して散心念仏であった。「我等が散心念仏としても、愚かなるべきにあらず」(八・五)。乱れて集中を欠いた心とする念仏でも、そう捨てたものではないとするのである。「往生要集」大文十に、「問ふ、定散の念仏は俱に往生するや。答ふ、懸重の心もて念ずれば往生せずといふことなし」とあるなどは彼の心の抛り処となったであろう。

以上のように、数奇説話は篇数は少いが彼の信仰の姿勢を解明するうえで極めて重要な意味を持っている。

## E 逸話・奇聞

この項に属する例話は三十篇を数えるが、そのうち、高僧、特志家の逸話ともいふべきものが六篇ある。(「表」○印)

- (1) 禅林寺永観律師の事(二・二)
- (2) 善道和尚、仏を見る事(二・13)
- (3) 永心法橋、乞児を憐れむ事(四・3)
- (4) 叡実、路頭の病者を憐れむ事(四・4)
- (5) 空也上人、衣を脱ぎ、松尾大明神に奉る事(七・二)
- (6) 阿闍梨実印、大仏供養の時、罪を滅する事(七・10)

の六話である。この中、(1)は白河院の命によって東大寺別当になって同寺の修復に当たった永観の逸話、(2)は唐の善導和尚が定中じょうちゆうに阿弥陀のお姿を見た話、(3)と(4)は高僧の慈悲の話、(5)は空也上人が着ていた法華經に染みた衣を松尾大明神にお着せ申した話、(6)は大仏供養のとき「大般若經」の「理趣分」を読んだ功德により一切の罪障を消滅した一僧の話である。長明がこれらの人の境地、行動に触発されてその道心を強めようとしたとも考えられるし、単なる説話、奇談的興味として書き留められたとも考えられる話群であるので、最初に書いたとおり一応区別したものである。

その他、「E項」の話群は、「A項」を捨身求道の一方の極とすればそれから最も遠い、つまり、求道的色彩が薄く、反対に説話的興味の濃い対極をなす説話群である。

- (1) 武州入間河沈水の事(四・9)

武州入間郡の官首が洪水によって一村あげて押し流され、妻子、

財産すべてを失い、溺れる途中で蛇の大群に全身を巻かれながら辛うじて助かる話。

- (2) 貧男、差図を好む事(五・13)

古いお堂を宿としているひとりの貧しい男が、反故を貰い集めては家の設計図を書いて慰めにして話。

この二話は、中でも、序文の趣旨から遠いと思われるものを抽出したが、一読して話の内容が求道発心と関係薄いものであることがわかる。その他の例話は、仏教的要素があるにはあるがむしろ説話的興味が中心になっていて、道心鼓舞のために書きとめられたとは思えないものである。これら序文の趣旨に反した説話がどうして採録されたかは「発心集」について考えるとき、大きな問題であると言わざるを得ない。

木藤才蔵氏の巻七、巻八に対する御説は前に書いたが、巻二、E項の四話「表」参照も序文の趣旨に副うものとした上で、この問題に触れて、概略、次のような見解を示しておられる。

(1) 巻四以後の巻々には、序文に示す編集方針から逸脱する話が相当多く収められている一方において、人の心のはかりがたさ、人間の執念の恐ろしさ、長明好みの数奇説話が収められている点などから、これらの説話の収集者は、その過半の説話に付された感想批評の執筆者ととも長明自身であろう。

(2) 巻四以後の説話の数篇には、露骨な説法口調、美文的表現等、長明らしからぬ感想批評があるのはなぜか。それについて考えるに、偶然説、唱導僧の解説づきの説話をそのまま取り入れた、手許に集めた説話に長明自身が書き加えた、の三つの場合しか考えられない。(3) いずれの場合にせよ、巻四以後の巻々の編者に長明自身を考える以上は、その時点において長明の心境に大きな変化があったと想定

せざるを得ない。それが無理ならば、巻四以後の編者には長明以外の人物を考えなければならぬとされた。

序文に言っているように、「発心集」は自分自身に言い聞かすためのものであったから、説教調や美文調は必要のないことである。しかし、自ら強く感じ、感情が激してくれば自分自身に言い聞かす口調が他人説得調になるといふことはありうることではあるまいか。ことに長明のように自分の「心」を他者と見て、これに語りかける傾向を持つ人の場合はなおさらである。また、最初に書いたとおり本書の編集に相当な年月がかかったとすれば、その間に執筆態度に(3)のような変化が生ずることは首肯されていふように思うのである。

最後に、表に見る、法華経、阿弥陀信仰について考えてみたい。中国の智顛は法華経によって天台山に天台宗を開基したが、八〇五年、最澄はこれを伝えて帰り、比叡山に日本天台法華宗を開いた。長明が、その叡山に学んだ源信の「往生要集」を、琵琶、琴、歌書の類とともに日野の方丈に携えていたことは「方丈記」に記するところである。彼がいかにこの本を愛読し、自家薬籠中のものにしていたかは「発心集」が示すとおりであり、先学達によって詳しく指摘されている。長明の信仰は源信教学を基本としていると言われる。いま、巻七・巻八を除いて考えても、はっきりとその字句又は関係事項の指摘できる法華経関係例話は十四編に及ぶ。しかし他に阿弥陀信仰に関するものが十二篇あり、全体のうち一篇の中に両方の信仰態度が併在するもの四篇である。では、このように法華、阿弥陀双修の態度が跡づけられるのはなぜであるか。法華経が平安朝において一般貴族の間で広く読まれたことは、文学作品によっても知ることができる。「枕草子」「源氏物語」

「更級日記」「今昔物語集」「宇治拾遺」等、多くの例証を挙げることができるし、「大鏡」の舞台となる雲林院の菩提講も法華経の講筵である。ところで、この経がなぜこのように広く読まれるようになったかについては、いろいろな要因があろうが、その最も主たるものはこの経自体に原因すると考えられる。

まず第一に、法華経は自経が諸経の中の最もすぐれたものであり、諸経の中の王であることを縷々と力説する。その記述は長々と続くのであるが簡単に示せば次の通りである。

「諸の小王の中に、<sup>た</sup>転輪聖王は最も為れ第一なるが如く、この経も亦復、かくの如し。衆経の中において最も為れその尊きなり。又、帝釈の、三十三天の中において王たるが如く、この経も亦復、かくの如し、諸経の中の王なり。(中略)一切の声聞・辟支仏の中に菩薩は為れ第一なり。この経も亦復、かくの如し、一切の諸の経法の中において、最も為れ第一なり。仏は為れ諸法の王なる如く、この経も亦復かくの如し、諸経の中の王なるなり。」<sup>(注)</sup>

これらの経文によつて法華経は古来諸経の王とよばれて来たが、王たるには王たるにふさわしい御利益がなければならぬ。それについては次のように述べる。そして、その素晴らしさが多くの信奉者を得た第二の理由であろう。

「この経は能く一切衆生を救うものなり。この経は能く大いに一切の衆生を饒益<sup>にぎやく</sup>して、その願を充滿せしむること、清涼の池の能く一切の渴乏せる者を満すが如く、寒き者の火を得たるが如く、裸なる者の衣を得たるが如く、商人の主(隊商の長―筆者注)を得たるが如く、渡りに船を得たるが如く、(中略)、この法華経も亦復、かくの如し、能く衆生をして、一切の苦、一切の病痛を離れ、能く一切の生死の縛を解かしむるなり。」

また、経自体についてではないが、観世音菩薩の靈験について、同普門品第二十五に次のように言う。

「善男子よ。若し無量百千万億の衆生ありて、諸の苦悩を受けんに、この観世音菩薩を聞きて一心に名を称えば、観世音菩薩は、即時にその音声を観じて皆解脱るることを得しめん。若しこの観世音菩薩の名を持つもの有らば、設い大火に入るとも、火も焼くこと能わず、この菩薩の威神力に由るが故なり。若し大水のために漂わされんに、その名号を称えば、即ち浅き処を得ん。(中略)、若し復、人有りて当に害せらるべきに臨みて、観世音菩薩の名を称えば、彼の執る所の刀杖は、尋に段々に壞れて、解脱るることを得ん。(下略)」と。

第三に法華経は女人についてその救済と福德を約束する。古来、「女身は垢穢にして、これ法器に非ず」(「提婆達多品」)として、極楽往生は難しいとされて来たが、この経は女人往生を真正面から取りあげている。「提婆達多品第十二」に語られる、サーガラ竜王の女の成仏談がそれである。「更級日記」の著者が「法華経五巻をとくならへ」と夢に見たというのはこれにほかならない。この日記の挿話は当時の女性にとって法華経が必読書視されていたことを物語っている。

また、「観世音菩薩品」には、女が男児を欲して子を産む場合、観世音菩薩を念ずれば、福德智慧の男子を、女子の場合は容姿端正にして衆人に愛敬せられるものを産むことができるとして、女性の幸福について約束している。

これらの経文は、とかく仏教から差別視され勝ちであった女性にとって、大きな魅力であったにちがいない。

以上はこの経自体の内包する要因を挙げたが、このほかに第四の理由として、当時におけるわが国の世相を挙げなければならぬ。平安中期、ことに道長の死を契機として鎌倉時代にかけて、序々に世情不

安は高まりつつあったが、長明が生きた源平抗争の時代はまさに乱世の極にあった。いま、試みに長明の生きた時代の大きな事件を拾ってみる。括弧内の算用数字は彼の年齢、傍線を施したのは「方丈記」にとり挙げられた事件である。

保元の乱(一一五六年)(2)。平治の乱(5)。頼朝伊豆配流(6)。京都大火(12)。同・鹿ヶ谷事件(23)。京都辻風・福原遷都・頼朝挙兵・義仲同(26)。清盛死・大飢饉明年まで(27)。平家都落・義仲入京(29)。義仲敗死・一の谷戦(30)。平家滅亡・大地震、義経衣川に死す(35)。鎌倉開幕・後白河崩御(一一九二年)(38)。頼朝死(45)。

長明の生きた一時期は殆ど無政府状態に近く、国民の大部分は生きる方途を失った。「方丈記」に、福原遷都を描いたあとに、

「伝へ聞く、いにしへの賢き御世には、あはれみを以て国を治め給ふ。すなはち、殿に茅ふきて、その軒をだにととのへず、煙の乏しきを見給ふ時は、限りある貢物をさへゆるされき。これ、民を恵み世を助け給ふによりてなり。今の世のありさま、昔にならざらへて知りぬべし。」

と激しく時の失政を批判している。「国々の民、或は地を棄てて境を出で、或は家を忘れて山に住む。」とか、「乞食、路のほとりに多く憂へ悲しむ声耳に満てり。」とか、民衆の困窮を告げる言葉が「方丈記」には多い。抗争戦乱というだけでなく、時代の様相をいっそう深刻にしたのは、貴族から武家へという、異質なものから異質なものの政権の交替が行われたところから生ずる価値の顛倒ということであった。人々は、外界においても、内界においても、すべて、頼るべきものを見失い、最後に救いを宗教に求めた。しかしこれは宗教一般について言えることで法華経に限ったことではなかった。しかし上述の

ように自ら諸経の王であることを明記し、男女を問わず読誦信奉の福徳を約束するこの経はこの時代の人々にとって大きな救いであった。であるから教学的な天台学とは別にこの経を持読する無数の人々がいいたことを渡辺照宏氏は次のように述べておられる。

「持経者とよばれる法華信仰者が奈良朝ころから鎌倉時代にかけて大ぜいいたことは、記録や物語文学に記されている。それは宗派や教理を超越し、ひたすら『法華経』の靈験を信じた人々であった。たとえば、十一世紀はじめごろ活躍した祈親上人定誉は法相宗を学び、高野山を再興した人であるが、持経者（法華経を持読する人―筆者注）として著しい。そのほか有名無名の無数の持経者がいて、中世紀を通じて、念仏者と平行的に発達していった。」（『日本の仏教』）

これらの人々が、諸経の中の王としての法華経に、救いのない時代における唯一の救済を見ていたこと、そしてその数が教学的枠を超えて多かつたことがわかる。

このように経自体の特殊性と時代状況と相俟って法華経は信奉されていったが、しかしこの経は決して無条件に救済と福徳を約束しているわけではない。宗教において、神仏の前に個人的、現世的功利の制約または放棄を前提とすることは当然であり、それなくしては宗教は成り立たない。法華経もその意味では例外ではないばかりでなく、大いにそれを要求する。「薬王菩薩本事品第二十三」には身燈が説かれている。それによれば、仏及び法華経に供養するために薬王菩薩はその身を灯明の代りに焼き尽くす、これを身燈という。供養のためには金銀宝石、あるいは土地財産等あらゆるものを捧げるが、その最大最重のものは身命を供養することであろう。個人に属する、物質的、精神的なすべてを供養する極限の形態がここに示されるのである。わが国においても平安後期になって身燈は流行したと言われ「発心集」に

も、卷三・5、同・7、卷八・3に見えるが、そのうち卷三・7「書写山客僧、断食往生の事、此の如きの行、謗るべからざるの事」において、「薬王菩薩本事品」の、「若し、人、心を起して菩提を求めんと思はば、手の指・足の指をとぼして仏陀に供養せよ。国・城・妻子及び太子国土、もろもろの宝もて供養するに勝れたり。」という経文をひいて、さながら身命を仏道に投げ入れて罪をつぐなえば仏の加護によって臨終正念することができるであろう。かかる捨身の行を非難する者もいるが、「みづから信せぬのみならず、他の信心さへ乱るは、愚痴の極まれるなり。」と長明は言っている。しかし、これは一部の非難に対して捨身の行を弁護する立場を述べたものであって、彼の態度は決して積極的にこれを奨励するとか、自ら実行しようとするものではなかった。信仰の態度としてはすべてを放擲して仏を供養し、その窮極には捨身に至るべきである。だがこれは誰にでもできることではない。ここにこの道が難行道とよばれる所以がある。卷三・8「蓮花城、入水の事」においては、入水往生を為損じた僧のことが語られるのだが、ここに、彼は、捨身の行の難しさを指摘して、軽卒に実行すべきでないことを諷めている。人が仏道を修業するために山林曠野に身を隠しても、虎狼・餓死をも恐れぬほどの覚悟が定まっていなければ仏天の庇護を頼むというのは危うい事であると言っている。彼は捨身の行を否定するのではなく、仰いで讃嘆している。だが、それを実行するには確乎不拔の道心が要る。法華経は強力無類であるが、その救済を頼むには身燈を以て供養するほどの覚悟が要る。法華経はそれを救済の代償として要求しているのである。きびしい教えと言ふべきであろう。

一方、阿弥陀信仰はどうであるか。卷六・13の後文に言つ。

「彼の極楽世界、願はば、生れぬべし。其の故は、本願に云はく、『我、仏を得たらんに、十方の衆生、心を至して信樂して、我が国に生れんと願ひて、乃至十念(数の多少を問わぬ念仏の意、テキスト頭注による)——筆者注)せんに、生れずと云はば正覺をとらじ。』と誓ひ給へり。」と書いてある。ここにいう本願とは、言うまでもなく「大無量壽經」の弥陀の本願で、その四十八願中の第十八願を指している。すなわち、「十方の衆生が至心に信樂して我が国(極樂)に生れようと念仏を唱えたのに、もし生れることができなかったならば、自分は仏にはなるまい。」と誓われた法蔵菩薩の誓願をいう。法蔵は阿弥陀仏がまだ菩薩として修行しておられた時の名である。この第十八願は四十八願中에서도とくに重要視され、本願中の王と呼ばれる。ここで注意すべきことはこの誓願はあくまで弥陀の誓願であって衆生のそれではない。従って、衆生の側には往生の代償として要求されるものは何もないということである。法華經の場合のように、救済の前提として果たさなければならぬ義務はないのであって、誓願を至心をもって信ずること、切に極樂に生れようと欲することが大事なのである。すべては弥陀御自身のみずからなる誓いにお頼りするにある。衆生としてはただただ有難いばかりの教えで、後に称名念仏は仏恩報謝の行であると説かれるのもここに由来する。だから長明は前文に続いて「財宝を施せよと説かず、身命をなげよとものたまはず、只ねんごろに弥陀悲願をたのみ、口に名号を唱へ、心に往生を願ふ事深くは、十人ながら必ず極樂に生るべきなり。」(傍点筆者)と書いてある。傍点部の文章は明らかに前掲の「薬王菩薩本事本」の手の指、足の指をとばして云々を念頭においた文章である。阿弥陀信仰はかかる財宝身命の供養を要求していない。ここに念仏が易行道とよばれる所以がある。

法華經のもつ厳しい教義が、多くの人々を阿弥陀信仰の易行道に転

じさせる契機になったのではないか。つまり、伝統的な法華經信仰を守り、その強大な福德を頼みながら一方においてはその厳しさを避け、弥陀の本願に縛るといふ天台淨土教の方向が生れたのであろう。

次に、法華經、阿弥陀關係説話の「発心集」における併在について考えると、巻七・巻八を除いて考えても、前者は一八・五、後者は一六パーセントに達する。しかも、前述のように一篇の中に両者の信仰態度の併存する例話が四篇もある。また「方丈記」には、「北に障子をへだてて阿弥陀の絵像を安置し、そばに普賢を掛き、前に法花經を置けり。」と書いて、両者の信仰に少しの矛盾も感じていないことがわかる。これはひとり長明だけでなく、早く慶滋保胤もその「池亭記」に、「西堂に参り、彌陀を念じ、法華を讀む」と書いてある。平安朝仏教においてはこのように法華經を讀誦し、阿弥陀念仏を唱えるというのが信仰の形式となっていた。吉田清氏は、「念仏は法華經と同じく滅罪の機能をもっていたのであり、法華と念仏は一セットとして存在したのである。」<sup>(注13)</sup>と書いて、法華經の呪力によって罪障が滅せられてはじめて念仏往生を可能ならしめると考えられていたと、両信仰併存の理由を説明しておられる。長明は法然とほとんど生存年代を一にするが、彼の信仰はまだ法然の淨土宗に踏みこまず、源信の強い影響を受けながら天台淨土教の枠内に在ったと考えるべきであろう。

「発心集」は序文に、静かに自分の心を反省してみるのに、善を背くにもあらず、悪を離れるでもなく、風の前の草のように、浪の上の月のように、煩惱に揺れ易く、不安定な、自分の心の状態を告白してをり、その「愚かなる心」をどうして教えようか、本書はそのために集めた説話群であると言っている。この意味で「発心集」は苦惱の書である。多少の夾雜物を含むとはいえ、多くは求道の精神に貫かれている。「A」「B」グループの例話がそれであり、巻七・巻八を除いても

四十三話、さらに「C」グループの「執心」説話を「A」、「B」の反義的同意表現と解釈すれば、序文本来の趣旨に合致する説話数は合わせて四十八、巻六までの総数七十五話の六四パーセントである。

しかし、彼の心は必ずしも求道一すじであったわけではなく、聖俗の間に揺れていた。数寄説話群ははっきりとそのことを現している。

彼は「A」、「B」の境地を願いながら、自分には到底かなわぬものとして散心念仏の境地にやむなくとどまろうとしている。数寄に遊ぶことも回向によって往生の助けとなし得るといっているのである。数寄説話は宗教家に徹し切れなかった芸術家長明の一面を示している。逸話奇聞の説話群もこの傾向に在るものとして考えることができる。以上、総括してみると、「発心集」は、彼の著作の中においても、過渡期の乱世を生きた一知識人としての長明の内面を最もよく伝えていると言いうことができる。

(昭和六一年九月三〇日受理)

注

- 1 中文館書店、「鴨長明の新研究」
- 2 新潮日本古典集成「方丈記・発心集」
- 3 右同
- 4 角川書店「方丈記全注釈」後記参考資料、梁瀬架蔵「明月記」
- 5 国書刊行会本「明月記」建仁元年三月条
- 6 群書類従本
- 7 梁瀬一雄編「校注、鴨長明全集」所収
- 8 笠間書院「鴨長明伝の周辺・方丈記」
- 9 国書刊行会本「明月記」承元元年十月廿四日条  
「秀能語」云、御障子歌皆被替了。兼日沙汰無性躰如反掌。萬事如此」
- 10 岩波書店「日本思想大系6・源信」
- 11 坂本幸男・岩本裕訳注、岩波文庫「法華経」、以下同
- 12 岩波書店「日本古典文学大系、本朝文粹」
- 13 有精堂「平安貴族の生活——『平安貴族の仏教信仰』」